IBDと就労

第20回　仕事には無理をせねばならない時もある

中山泰男
なかやまやすお●1964年生
17歳でクローン病発症。小腸機能障害1種1級。2001年熊本IBD設立。現在は養護老人ホームの施設長として勤務。趣味はツーリングと全国患者会めぐり。熊本IBD会長。九州IBDフォーラム代表。

5月のある早朝のこと。携帯が鳴り、出てみると「もう仕事に耐えられません。辞めます」といきなりの退職宣言である。相手は初就職したばかりのMさん（26歳UC）。地域若者サポートステーション*から紹介された彼女とは、かれこれ15ヵ月就職相談に乗り続けてきた間柄。1ヵ月前にめでたく就職し、やっとひと息ついたばかりだった。16歳でUCを発症。直後にトイレの回数をからかわれ、登校拒否となって高校を中退。その後、大検に合格し、私立大学の2部を卒業したものの、社会に馴染めず2年間も引きこもっていた。とにかく出勤前なので、夜に会う約束をして電話を切った。

終業後、近所のファミレスで話を聞いた。仕事を始めて2週間経った頃から、安定していた下痢が10回以上に増えたという。腑に落ちないので、職場での彼女の心理状況を尋ねてみた。「仕事の説明を受けても覚えられない」「指示されたことに対応できずパニックになる」という。それで不眠が続き体調を崩したようだ。「私のような病人に仕事は無理なんです」というので、私は「今より下痢が増えるなら医師に相談しよう。しかし、今は踏ん張りどころだ」と言うに留めた。最初から仕事ができる人はいないし、上司だって就職した時には同じ不安を抱えていただろう。病気は関係ない。「今は叱られるのがキミの仕事だ。とにかく3ヵ月は職場に居続けろ」とアドバイスして別れた。

Nさん（23歳CD）は、12歳で発症。苦労の末に専門学校を卒業し、昨年4月、量販店へ就職したばかり。たまたま、職安でCDであることを打ち明けたため、難治性疾患患者雇用開発助成金**の対象者となった。彼女のお母さんと私の友人が知り合いだったご縁から、相談に応じていた。

就職したての頃は、不安がる彼女に「会社は、難病者とわかった上で採用してくれた。無理を重ねる努力より、正直に伝える努力をするように」「仕事には積極的に関わるように」と助言していた。今年の3月末、久しぶりに彼女と会い、会社の配慮状況について聞いてみた。「会社から、通院日の翌日に必ず結果を聞かれる。最近、体調不良で休みを申し出たが嫌味を言われた」とかなりの不満を漏らした。私は、上司や仲間に対し、君自身の体調管理の方法について、共有しているかと尋ねたが、彼女はキョトンとした顔をした。病気があるからこそ、体調が悪ければ職場での食事を経腸栄養剤に切り替えたり、同僚と遊びに行きたくても控えたりと、体調管理の努力が必要だ。休みだからと朝まで遊んでいては誰も信用してくれない。努力を見せることも職業人としては大事なことだと話した。彼女は、ハッとした表情を見せ、「そんなことを考えもしなかった」と口にした。

アスリートは肉体に一定の、あるいは、過度の負荷をかけて更なる進化を目指す。同じことの繰り返しだけでは、上のステージに立つことはできないだろう。私たち職業生活に当てはめて考えてみよう。新人とは足手まといな存在だが、1年、2年と経験を積むことで、仕事の流れや人間関係が見えてくる。大変だと思えたものが、ある時期から、当たり前にできるようになる。これはスキルが身につき、幅が広がったことを意味する。「肉体にかける負荷」とは、「上司に叱られ、泣きながら仕事を覚え、職場に馴染むこと」だ。職業生活でひとつ上のステージに立つには、「決して無理せず」では難しい。辛口だが、私は「仕事は無理しないように無理しなさい」「泣いた数だけ幸せになれる」と思うのだ。

病気を抱えて成功した人の多くは、自分の身体的なリズムや傾向を熟知し、いざというときの対処法や引き際をも身につけている。これこそチャレンジし続けてきたからこそ習得できたものといえるだろう。寛解期こそ成長する絶好の機会ではないか。

＊ 地域若者サポートステーション…働くことに関するさまざまな悩みを持つ若者をサポートする支援サービス

＊＊ 難治性疾患患者雇用開発助成金…難病患者を雇用した場合に、事業主に対して賃金の一部に相当する金額が助成される制度